

童話集
森の中のクー

岩崎
俊

青山ライフ出版

家族の一員だった猫の「くー」へ

猫語を話せるなら、一度、聞いてみたかった。

「どんな夢を見るのか。お母さんのことは覚えているのか。」

森の中のクー もくじ
.....

あとがき	渡り鳥ミヤコ	もぐらの冒険	森の中のクー
65	47	31	5

森の中のクー



これは森の中に捨てられてしまった子猫のお話です。

子猫は、夢を見ていました。お母さんに抱かれておっぱいを飲んでる夢です。眠っているのは、春の森の中、冬から残っている枯れ草の上です。あたたかい日の光が、木の枝の間から降りそそいでいます。枯れ草を、お母さんのやわらかな胸むねだと思って、右手と左手で代わりばんこに押しています。すると、とつぜん強い風が吹いて、飛ばされてきた大きな葉っぱが子猫の顔とひげをなで、目が覚めました。

「ああ、そうだった。お母さんはいないんだ、



ここには。お姉さんも、お兄さんもないし、わたしは一人ぼっちになったんだ。」そして、とても、のどがかわいていることにも気がつきました。眠^{ねむ}っていたところの近くには、きれいな水の池があるのですが、その水を飲むことができません。なぜって、地面から水面までが斜^{なな}めに下がっていて、子猫にとっては、がけのようになっているからです。

でももう、のどのかわきをがまんができません。思いきって、草につかまりながら、降^おりて

いきました。ところが、つかまっていた草が、根っこから抜け、自分が池の中に落ちてしまったのです。子猫はあわてて、水の中で手と足をバタバタと動かししました。さいわい、池は深くなくて、体中ぬれてしまいましたが、土の上に戻ることができました。

草につかまってがけを登るのは、下るよりは怖くはありませんでした。やっと、枯れ草かの上に戻って来て、お母さんがしていたように、体をなめました。少しだけですが水を飲むことが



できました。ここに来る前にこんなことがあったなら、きつとお母さんがなめてくれたことでしょう。あたたかな春の風が子猫の体を乾かわかしてくれました。ひと安心すると、すぐにまた眠ねむってしまいました。

ふたたび目が覚さめたとき、あたりはもう、うす暗くなっていました。とてもとても、おなかですいています。「お母さんに会いたい。」そう思って、なみだが出てきました。すると、「ホウ」、「ホウ」という鳴なき声がします。ふくろう